

かずお
大森 運夫

日本画家

(豊橋市美術博物館HP等を参考)

大正6年(1917)、豊川市三上町みかみに生まれた大森は、郷里の中学校で国語教師をつとめていましたが、中村正義まさよしと出会いによって独学で日本画を始めるようになります。33歳という遅いスタートでしたが、昭和26年(1951)には新制作展および日展に初入選を果たし、以後新制作展に入選を重ね、骨太ひつちい筆致で風景や人物を描きました。昭和37年(1962)からは、教職を辞し、川崎市の中村正義の宅地内に転居して画業に専念します。また同年、第26回新制作展に出品した「ふきだまり」三連作により、新作家賞を受賞しました。この時期の主題は都市の底辺に生活する労務者らの姿で、画風においても顔料を厚く盛って硬質なマティエールをつくりだすなど、より激しい表現へと発展をとげます。対象が九十九里浜のたくましい漁民たちの姿に移ると、作風は明るさと大らかさに満ちたものとなり、さらに昭和41年(1966)の欧州旅行で目にしたロマネスク彫刻からの強い印象をもとに人物のデフォルメをいっそう押し進め、「モロッコ」や「オホーツク」などの連作を生み出しました。



やがて、描く対象を自国の豊饒ほうじょうな伝統芸能や祭りへと移し、演者だけでなく伝統を支える民衆の力を画面に融合させた勇壮ゆうさうで躍動感あふれる祭りシリーズが始まります。昭和52年(1977)からは東北地方の土着の風俗に身を包んだ「おぼこ」に着目し、画風は動的な荒々しい表現から静的な写実描写へと変遷へんせんを遂げました。昭和59年(1984)からは人の生き様をうつしとったかのような浄瑠璃人形じょうるりを主題に描き、幻想性ある世界をつくりあげます。また形状をとどめない破損仏にも取り組み、近年は現代に生き、彷徨ほうこうする若者たちの姿を対象としています。平成4年(1992)には豊橋市美術博物館において初の回顧展「大森運夫展」を開催するほか、平成9年(1997)には豊川・桜ヶ丘ミュージアムにおいて「大森運夫—民衆の心を描く—」が開催されています。

<略歴>

- 大正 6年(1917) 豊川市(八名郡三上村)の農家の長男として生まれる。
- 大正 9年(1920) 父親が逝去、以来母親の手ひとつで育てられる。
- 昭和10年(1935) 豊橋第二中学校を卒業、岡崎師範学校へ入学。

- 昭和12年(1937) 岡崎師範学校を卒業し、八名郡富岡尋常高等小学校へ赴任する。
- 昭和14年(1939) 宝飯郡牛久保尋常高等小学校へ転勤（1年8ヶ月富岡小勤務）
- 昭和25年(1950) 中村正義と出会い、日本画をはじめめる。
- 昭和26年(1951) 第15回新制作展、第7回日展に初入選。
中村正義らと画塾・中日美術教室開設。
- 昭和33年(1958) 中部日本画総合展最高賞受賞。
- 昭和37年(1962) 教職を退き、上京して画業に専念する。
第26回新制作展で新作家賞を受賞。
- 昭和41年(1966) 第1回神奈川県展で大賞受賞。ヨーロッパを歩き、ロマネスク美術に啓発される。第16回新制作協会日本画部新作家賞。
- 昭和46年(1971) 愛知県立芸術大学講師を務める。新制作協会会員に推挙される
- 昭和47年(1972) 新鋭選抜展で優秀賞を受賞。
- 昭和49年(1974) 新制作協会日本画部が独立して創画会となり、以後創画会会員として同展に出品を続けるほか、日本秀作美術展などに出品。
- 昭和50年(1975) 第3回山種美術館賞展で大賞を受賞。
- 昭和56年(1981) 「現代日本美術の展望－日本画」展（富山県立近代美術館）に出品。
- 昭和63年(1988) 「今を生き、そして描く－日本画現代」展（福島県立美術館）、
「日本画－戦後の歩み－Ⅱ」展（いわき市立美術館）、現代日本画巨匠展（茨城県立近代美術館）に出品。
- 平成4年(1992) 大森運夫展（豊橋市美術博物館）に出品。
- 平成6年(1994) 「現代日本画の展開」展（富山県立近代美術館）、日本画家五人展（豊川・桜ヶ丘ミュージアム）に出品。
- 平成7年(1995) 松坂屋（名古屋、東京、大阪）で新作展開催。
- 平成9年(1997) 「大森運夫－民衆の心を描く」展（豊川・桜ヶ丘ミュージアム）が開催される。
- 平成10年(1998) NHK「美の朝」
テレビ放映



伊那谷の人形たち 昭和63年